

鉾石の採掘が目的であった。ここは、重慶から日本空襲の通路で、B 29 が三十機、五十機と東京に行くのがよく見えた。西方は八路軍の地区で、なんとか夜襲を受けた。

夜は常に非常態勢であった。日本の敗戦は、九月中旬に判明、周囲は包囲されており、夜半十二時に駐屯軍と避難した。石家荘から北京に至るまで二週間ほどかった。

わが家に帰って数日後、国民党の軍人が五、六人、土足ではいり、現金、貴金属を持ち去った。その後、身のまわりの品を持ち、北京郊外に移住し、ここで三男をぶじ出産した。昭和二十一年一月頃まで生活し、引揚げのため、天津タンク埠頭の貨物廠に収容された。一世帯三畳のスペースにゴザ敷きで、一日二回の食事で非常に粗末だった。一か月ぐらいここで暮し、三月末にLSTで山口県の仙崎に向かう。

三男が船中で肺炎となり、仙崎から福岡の妻の実家へ落ちついた。私は肝臓黄疸となり、約六か月世話になった。妻の実家は農家だったし、近所の農家から野菜を仕入れ、行商を始めた。そして、保険のセールス、建設会

社の現場事務員等できることはなんでもやらなければ食うことができなかった。

ところが妻が肺結核を発病、二年後に死亡してしまった。新しい出発のため、子どもたちを親戚縁者にあずけ、上京し、消化器メーカーのセールスになり、その後代理店を開設し、渡航から実に二十年を経過してなんとか生活の安定をみることもできた。

今思うことは、あの大戦で、多くの戦争犠牲者が出たなかで、せめて重要産業要員として国に奉仕できたことと、生存して今日あることは、さいわいであると思つづくと思う心境である。

引揚げ時に、お金と食料をくれた人

岐阜県 中井 千秋

昭和二十年八月十三日、親しい中国人から、日本は降伏した、と聞かされたが、半信半疑で、そう不安はなかった。しかし八月十五日終戦の詔勅の放送があつてか

ら騒然となった。

華北交通は、中華民国に接収され、私たち運輸局員は中国側に留用という名称でとりあえず従来の待遇のまま働けることになったが、家族を天津から呼ぶ必要が生じた。

家財その他を天津北駅から貨車に積んで北京駅まで送ってもらったが、着いてみると、貨物は無惨にも開封され、中にあった食糧品、衣類などが窃取されていた。文句を言えないほど、弱い立場の日本人になっていることを痛感した。

会社で用意された社宅にはいってようやく落ちついた十月のある日、勤めから帰ってみると、昼頃中国兵が四、五人はいってきて土足のままあがり、衣服やカメラなどを持去っていった。妻は子どもたちを両脇に抱えて、部屋の隅で生きたこちもななくまっまっていったという。

終戦の八月、妊娠をしていた妻の出産は一月となっていた。日本人の産婆は、昼間ならこれるが、夜になると治安が悪くてこれないから、いつ生まれても赤ん坊をとりあげ抱えられるよう勉強しておけとのことで、出産関

係の本を何度も読んで、その日にそなえていた。

二十一年一月二十九日の夜、陣痛が始まった。本に書いてあるとおりの容態に応じて出産の用意にかかった。

午前五時出産がはじまった。私がすべてを処置せねばならなかった。ヘソの緒を首に巻いたまま出てきた女の子は泣かなかった。窒息していると感じた私は、手のひらに入るくらいの小さな子に柔道の活を入れた。それがきいて大きな声で赤ん坊は泣いた。うれしかった。日が出てから産婆がきて、私の処置をわらったが、生命を助けた自負で腹もたたなかつた。

蒙古にソビエト軍が侵入し、国民党軍と中共軍との和解もできず、アメリカの仲介も効果なく、北京にも戦禍がおよぶかもしれないという不安から、私は留用で中国に残る考えをすてて、故国に帰るべく上司に退職を願ったが許可されなかつた。

家族が脚気という病気で日本に帰らないと治らないからと申し出て初めて留用をといってもらい、解雇という形で一か月分の給料を余分にもらった。

生後一か月も満ため赤ん坊をかかえ、小さな子どもの

手をひいての集結生活、貨車に乗せられての引揚げ列車の苦しみなどいろいろある。

引揚げの途中、駅で昔をいっしょに働いた中国人の駅員から、抱えきれないほどの食べものやタバコ、サイダーなどをもらったこと、走り去る私の貨車にとび乗って法幣二万円をむりやり渡し去っていった名も知らない駅員など良い思い出もたくさんある。

終戦時日本人の駅員がいっせいに中国人になぐられたとの話のあの天津の駅の心あたたまる思いは、苦勞のすべてを消し去るものである。

終戦は私にとって幸福というものを教えてくれた貴重な機会であった。

引揚げ船「江島丸」の沈没

東京都 北川 正

昭和二十一年一月厳寒の日、上海港から出港する引揚げ船である江島丸に乗ることができてほっとした。支那海

はどこまで言っても黄色である。この海水の色は揚子江や黄河の吐き出す泥土のためと聞く。

婦女子も多数乗船していた。その班長を命ぜられて、それらの世話を見ることになった。私は蚕棚の下方に横たわり、婦女子は床上に座を占めた。走ることに数時間を経て夕食の用意にかかったときであった。突然大きな爆発音とともに、船体が震動した。船中の人々は一瞬しんと静かになった。

「ただ今の音は、船の機関室の故障ですから、間もなく修理されますので、皆様そのまま静かにして下さい。」と船内に放送された。

その声が終わるや船内は、にわかに騒々しくなり、元気な男たちは、皆蚕棚から飛び降りて船室の中央に向かって一散に駆け出した。ここには船室から甲板板が出るための一本の梯子が掛けられていた。たちまち梯子のまわりは人の群れで一ぱいになった。上れるのは一人ずつである。若い元気者は他人の肩であれ、頭であれ飛び渡って梯子を目がけて飛びつく。地獄に落ちた餓鬼どもが一本の蜘蛛の糸を目がけて我先にとりすがする姿は斯く